第 2015-22 号

恵みと真理のニュース

2015 年 5 月の五次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

[証]　奉仕の職分を受けて従順して支えると私の信仰が強くなり子供達も健康になりました

イエス様を信じない不信家庭で生まれ神様とイエスキリストについて全く分からなかったです。そして青年になり一人の兄弟を知り付き合って初めて教会に行きました。今の旦那は当時スワンの恵みと真理教会に通い熱心に教会で奉仕する真実な青年でした。
恋愛する期間と新婚の時には強制的にたまに教会に行って礼拝を参席しました。礼拝に参席してもいつも居眠ばかりでした。ある日は旦那に私と教会には合わないと他の宗教に行ってはいけないのかと言ったこともあります。
　そうするうちに旦那の健康に以上が出来て妊娠したから熱心に神様に礼拝を捧げました。旦那の健康の回復に対する切なさと共に教会学校でイエス様の愛を受け健康で育つ子供達を見ながらこれから生まれる子供もきれいで健康に育つ願が出来たからです。礼拝に熱心に参席しましたが一時期、聖書の内容が分からなくて説教も難しく聞こえました。まだ残っていた習性で教会に通ってもたまには生活の中で世のことと妥協して私の考えで神様を判断して理解して支えました。
　そのように相変わらず信仰の成長と発展もない私に教会を仕える尊い職分をくださいました。児童区域長と教会学校の幼稚部の教師で用いてくださいました。教会でどんな職分を受けるには足りなくて弱い信仰でした。さらに世の知識と経験ではなくて聖書の御言葉と祈りで子供達を教え見守るのは私が考えてもやさしいことではありませんでした。教会で信仰が良い方達が多いがなぜ私にそんな職分を与えたか理解出来ませんでした。 どころがこのように神様に呼ばれて私に対する神様の特別な愛と摂理があったことをすぐ分かるようになりました。様々なものが足りない私に担えられない職分でしたが、従順を決断して職分を担ったら神様は私に溢れるほど愛を与えて下さり、瞬間瞬間に神様の愛を悟らせてくださいました。体験を通して神様とイエスキリストに対する信仰が深く成長するようになりました。私の信仰が良くて職分を下さったのではなくて哀れんで神様は体験を通して信仰が硬くなるように摂理してくださるため職分を下さったことを悟りました。
　わたしの家庭のプレゼントである二人の子供達、コンウとエオンも主日事に事前に私をついて教会に来てイエス様の愛の中で大きく育つようになりました。私もまた子供達を教えるため熱心に聖書を勉強するようになり礼拝時間には御言葉の恵みを愛して説教の一言も集中して聞き神霊と真の礼拝を捧で教会の生活が楽しく変化されました。私も働いているので早く子供を離れで子供達は主日になると私と離れないようにして一時期は幼稚部で奉仕して他の子供達を教える事が難しかったです。母と父が忙しい職場生活のため一人で多くの時間を過ごしたせいか息子には“チク”というが現状あって他の子どもと比べると心が弱くて人見知りが酷かったです。6歳になって2歳の下の妹に頼ってやっと幼稚部で礼拝を捧げ始めるほど弱かったです。
　二番目の子も病弱で風邪を引いたらすぐ肺炎と喘息を患いました。体に少し熱が出ると虫を起こして心配でした。私の家庭の一番大きい祈り課題でした。こんな二人が教会学校で礼拝を捧げるためい後ろの姿を見て“母と離れて礼拝を頑張って捧げるか”まだ子供なのに説教を理解して理解して習えるか“むしろ世の様々な事を見させて現場学習をつれて行くのが良いのではないかと”間違った考えで疑いながら一年半が過ぎました。驚くことは子供達が変り始めました。私だけついていた一番の子も一人で幼年部の礼拝を捧げに行って友達と良く交わって大きい声で賛美して祈りもするようになりました。そしてイエス様に対するきれいで純粋な信仰で切に頭と胸に手を置いて祈った二番目の子はある日から虫を起こした事もなく健康に幼稚部の礼拝も正しい態度で捧げるようになりました。
　共に道を歩いても車の中でも二人の口でいつも賛美して家でも賛美と振り付けもしながら楽しんでいます。体も心も丈夫になり信仰もきれいに育つのを見るのが嬉しいです。疲れた父のため祈る事も出来て信仰が弱くてよく倒れる母のためにも祈ってくれるコンウとエオンを見ると幸せで私達の家庭にこのような恵みと愛を与えて下さる神様にただ感謝するだけです

[信仰コラム]　キリスト中での死と生命と幸せ

″… もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである …″(ローマ人への手紙, 6 :3～11)

人は誰も幸せに長く生きるのを願います。 このような願いを遂げるために人間はあらゆる努力を競走しています。 しかしこのような渇望に対する究極的な解答はただ聖書にあります。 ところでその返事は非常に逆説的です。 ″死ななければならない″と言うのです。 逆説的なその返事の意味をよく見ます。

第一に、永生を得ようとすれば死ななければなりません。
今日の特に生命科學の発展は若さの維持と寿命延長に朗報を伝えています。 しかし科学の研究と開発が人に若さの維持と寿命延長の夢をかなりかなわせた場合に果してこの世の中は住みやすい所になるのか疑問が申し立てられます。
私たちが現在住んでいる地球は日増しに汚染して資源は枯渇して行きます。 このような所でもし永遠に住むようになると言えば決して愉快な生になることができないだろう。 そして科学がいくら発展すると言っても私たちが享受することができる健康と若さは限界があります。
聖書が私たちに提示して約束する長生不死とは地上の生に限定されたのではないです。 栄えて神霊な身を着て天国で永遠に暮すことが聖書に約束されている永生です。 このような永生をどのように得ることができますか? その返事は死ななければならないというのです。 これはイエスキリストにあって経験する死を示します。 イエスキリストを信じれば聖霊の役事なさることでイエスキリストの中にあるようになってイエスキリストと神秘的な連合を成すようになります。 そしてイエスキリストとともに十字架に釘付ける者になってイエスキリストとともに葬られたところになって、また死んだ者の中でイエスキリストを起こした神様の役事を信仰によってその中で一緒に 起きる事を受けた者になります。 イエスキリストを信じてキリストにあって一緒に死ぬこの驚くべきで神秘な体験がなくては変化された身で天国で永遠に住む道は決してないです。

二番目で、この世の中で本当によく生きる者になろうとすれば死ななければなりません。
世の中で名声や地位や財物を所有するのがよく生きる人生になる必須要件ではないです。 本当によく生きる者になろうとすれば先に聖徒らしく、義人らしく生きなければなりません。 聖徒らしく生きて行くためには昔の人の性分が死ななければなりません。 どのようにすれば昔の人の性分が死んで聖徒らしい行実に生きて行くことができますか?

第一、ローマ人への手紙 6 章 10 節、11 節にその解答があります。 先に、私たちが罪に対しては死亡者で思わなければなりません。 私たちがイエスキリストを信じる時イエスキリストにあって一緒に十字架に釘付けられて死んだ事になります。 この時律法に対して死んで罪に対して死んだのです。 だから死亡者が反応がないことのように私たちは罪に対して反応があってはいけないです。 次に、私たちが神様を対しては生きる者に思わなければなりません。 神様を対して肯定的で積極的な反応を見せなさいというのです。 神様に対して生きる者になれば聖霊の引導を従うようになって肉体の欲心・所欲は死ぬようになって聖霊の実を結ぶようになります。

第二、ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節にその解答があります。
生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉体にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのであるのを自覚を持たなければなりません。 以前には自分の欲心と思った通りに暮したがこれからは自分の中心にイエスキリストが生きていらっしゃって主張のよって生きて行きます。
実は人生はキリストの中での死と生が分からなければ生と死の意味をまことに分からないです。 死ねば永遠に生きるようになります。 イエスキリストの中で律法に対してた死んで罪に対して死亡者は永生を得ます。 死ねば幸せです。 イエスキリストの中で昔の人の性分が死んで自我が死ねば神霊な喜びと平安を享受することができます。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

信仰を守った人

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

“健康を失えばすべて失う。” という言葉があります。 しかし事実は健康よりもっと重要なのがあります。 それは信仰です。 “信仰を失えばすべて失う。” という言葉は真理です。別に言わば “信仰を失わなければ事実上失ったことがない。” と言えます。 この信仰は霊魂の救いを得させる信仰を示します。 人類の先祖アダムの犯罪によってアダムの子孫で生まれたすべての人は罪人になって滅亡を免れることができなくなりました。 だから人がこの世の中で住むうちに一番重大した急先務は滅亡を免れて魂が救いをもらう事です。 その解決策がイエスキリストです。 神様の子であるイエスキリストが世の中へいらっしゃって罪人の代わりに刑罰を受けました。 十字架に釘付けられて 血が流れて死んだのです。 そして三日ぶりに復活しました。 こういうわけであがないの使役を成功的に成就しました。 もう残った事は私たちの罪をあがないしたイエスキリストを各人が自分の救世主に信じて迎接することです。 聖書に記録された救いの福音を集約した句節があります。 ヨハネによる福音書 3 章 16 節と 1 章 12 節です。 “神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。”、“しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。” としました。
イエスキリストを信じることはとてもたやすい事でまた非常に難しい事です。 イエスキリストを信じることがとても易しい理由を列挙して見ます。 第一、体力が必要ではないです。 第二、学歴が必要ではないです。 第三、お金が必要ではないです。 第四、生の経験が必要ではないです。 五番目、社会的地位が必要ではないです。 イエスキリストを信じることがとても難しい理由も列挙して見ます。 第一、他の宗教を信じているからです。 第二、無神論思想に濡れているからです。 第三、否定的な先入観念のためです。 第四、周囲の人々の反対や逼迫のためです。 五番目、俗事に没頭するからです。 六番目、福音を接することができる機会がないとか稀薄であるからです。 七番目、福音を間違って伝える人々のためです。こんな理由を考えて見ればイエスキリストを信じる人はすごい幸せ者です。 しかしその信仰を守らなければなりません。 このために今日の本文のお言葉を傾聴しなければなりません。そしてこのお言葉を記録したパウロ使徒を模範としなければなりません。

先に、パウロ使徒がどのように信仰を守ったのかをよく見ます。
“わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。”(テモテへの第二の手紙 4:7)と言いました。

第一部分は、“わたしは戦いをりっぱに戦いぬき”です。

クリスチャンは不信者が分からない多くの種類の戦いを争いながら生きて行きます。もしこのような戦いがなければただ名目上のクリスチャンであるだけです。 悪魔との戦いがあります。 悪魔がクリスチャンを攻撃する目的は大きく二つです。 礼拝と奉仕と伝道をおろそかに思うようにすることと結局にはキリストを離せるのです。 このために悪魔は脅威と誘惑でありなさいという方法を使います。 だから聖徒の皆さんはこのような悪魔の計略にきっぱりと対処して応戦してください。 この世と戦いがあります。 ヨハネの第一の手紙に記録されるのを “世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。”(ヨハネの第一の手紙 2:15,16) しました。 自分との戦いがあります。 霊的進歩に欠点になる性分を殺すための戦いです。 その性分と言うのは怒り、我執、驕慢、性急、怠惰、ねたみ嫉妬心のようなものなどです。 このような戦いで勝とうとすれば ① 自分の悪い性分を妥当化してはいけないです。 ② これをとり除こうとする決心がなければなりません。 ③ 悔い改めがなければなりません。 ④ 聖霊の助けを求めなければなりません。

二番目部分は、“私の走るべき行程を走りつくし”です。

すべての事に開始は易しくても最後まですることは難しいです。 競走する選手は “駆け付ける道”で走らなければなりません。 逼迫や苦難があっても中途にあきらめてはいけないです。世の中の誘惑に導かれてパウロ使徒を立ち離れたデマのようになってはいけないです。

三番目部分は、“信仰を守りとおした”です。

昔にもそうであったが末世の今日には福音を混雑させる者等が暴れ狂っています。 イエスキリストを信じるが聖書に啓示されたとおり信じなければなりません。 これを明確に現わしてくれる聖書の句節があります。 ヨハネによる福音書 14 章 6 節と使徒行伝 4 章 12 節です。 “イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。”、“ この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」” このような聖書のお言葉と違うように言う人々の信仰はうそです。 聖徒の皆さんは先日を回想しながら “わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。” と言えるように願います。

次は、信仰を守ったパウロ使徒が期待したのが何やらよく見ます。

“今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。”(テモテへの第二の手紙, 4 :8) しました。

第一、“義の冠”と言うのはイエスキリストを信じて義のあるようになった者に授けられる冠です。

ここで言った “義”は人の努力と行為によったのではないです。 天の法廷で裁判長になる神様が “義のある”と宣言したのです。 このような宣言はただ一つ場合にだけ当たります。“すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。”(ローマ人への手紙, 3:23～26) しました。人が義のあるのを得ることはイエスキリストを信じる信仰によることでまたイエスキリストによる恵みによるものです。 ただ信仰、ただ恵みで義のあるのを得ることになります。

第二、“義の冠が私のために予備されたので主すなわち義のある裁判長がその日に私にくださるでしょう”としました。

こんな信仰のない人は死の日が一番さんたんな日になるでしょう。 義のあるのを得ることができなかった人は神様の前に立つことができないし結局最後の審判台で審判を受けてわずか硫黄で燃える池に投げられるでしょう。 だから義のある裁判長である神様が予備なさった義の冠を私にくださるはずであるという信仰でときめく期待感を持った人の幸せはこの世の中の何とも替えることができないです。

第三、このような義の冠がパウロ使徒にだけ予備されたのではないです。

“主すなわち義のある裁判長がその日に私にくださるはずであるから私にだけではなく主の現われを慕うすべての者に” と言いました。 “主の現われ”と言うのは主イエスキリストの再臨を示します。 キリストがこの世の中に一番目いらっしゃった時は私たちの罪をあがないする任務を遂行しました。 二番目いらっしゃる時は聖徒を迎えに出て審判のために来ます。真の信仰を持った聖徒なら誰も神様の再臨を信じて慕います。 “主の現われを慕うすべての者”に義の冠をくださるでしょう。

人生は誰もこの世を去らなければならない瞬間を迎えるようになります。 その日がいつなのか分からなくても “離れる約束”があります。生まれた日と死ぬ日の間の間隔がいくら大きいと言っても結局経ってみれば少々です。 この世の中で生きて行く一一生がたとえ苦難に点綴されたと言ってもそしてどんな状況で死を当たるようになると言ってもそういうことがあまり重大ではないです。 重要なことは皆さんがいつでも先日を回想して、未来を眺めながら次のように打ち明けなければなりません。 皆さんの生まれた日がそれでは幸運の日で暮した歳月の貴い日々になるでしょう。 “わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。 今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。”(テモテへの第二の手紙 4:7,8). 皆さん皆このような美しくて幸せな回想と期待を言える聖徒になるように願いします。